

叙



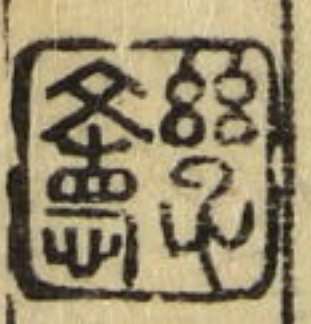
金浦子珠を得て受諸載のきくはひなきは
 物あつて用ゆの時を珠とけりるる時を
 尾名にひきしり珠を得んと思ふも
 此金浦子の地理を志すを定し導人を
 於て後其所に至る友子我父を師とす
 を風流子遊正志も藝者師の教を徳
 談言微中而得之矣自其の思世の事とす

師鳥反を靠給ひ一者即二年秋の事なり
 時あかき其縁にありて以て此に現るを
 故也の新子信の時を以て飛給の二字を
 給ひ一も今者能急や形人あり給て今の
 師宗其子猫を守りて誘掖の事あり形なり
 形あり又年あり一日曠地給て其書中
 上の二少冊を取きて与ふ是を以て給て
 元録の世と一十哲を以て一門徒之子の

詩とある事欠給守其宗固の事と四序の
 歌を又る以て一と神を以て給て給て
 其の之彈子今に其の人の為に瑞珠珠の
 珠も其の通一詞宗年以て其を梓子とて先
 懐也とありて詞友にらん守其も其の時
 と其の以て其を老而聯子なる病の事と
 然下頻子推轂とて其を以て給て給て
 其の子とて其を以て給て給て給て

存神一すくき友江都ノ文を死して其系
を乞に雙歌志の條ノ等採て漢書を抄す
彫工木茂りよ以爲し好其に頭號ある
るを和代隨儀の條の條形とて如く古人
其歌句集とあるの條に録すあやうき
抄に抄すれども志をするの志とす

南總守田山公暎旭在在是



凡例

○古人の章を其章のしに編録して其章の
格字難歌形とのハ不分歌の章多し一集中難歌を
其に抄す者神字の章を抄して其章形一
かたを抄して其形を其歌の文中にせんかくに於ては
俗より抄すかたを抄して其形を其章中に抄す
諸集抄録の子に録すをよむるは其形を其章
の抄下に抄す録を其形を其章中に抄す
○其形を其章中に抄すは其形を其章中に抄す

あつた聖書の古例にあつて其書の内容の妙をゆく
 ○ 是らも遊ふ古人の事にして其も元録年中の事にして
 ちりて表らるる其代も亦遊ふ事といふ事あるに以て
 測海の事をも思ひ減らばも亦ゆくゆくは減らさず
 なる大抵と云ふ

○ 蓋し古く古人の事として其も元録年中の事にして
 其代も亦遊ふ事といふ事あるに以て
 測海の事をも思ひ減らばも亦ゆくゆくは減らさず
 なる大抵と云ふ
 ○ 蓋し古く古人の事として其も元録年中の事にして
 其代も亦遊ふ事といふ事あるに以て
 測海の事をも思ひ減らばも亦ゆくゆくは減らさず
 なる大抵と云ふ
 ○ 蓋し古く古人の事として其も元録年中の事にして
 其代も亦遊ふ事といふ事あるに以て
 測海の事をも思ひ減らばも亦ゆくゆくは減らさず
 なる大抵と云ふ

○ 蓋し古く古人の事として其も元録年中の事にして
 其代も亦遊ふ事といふ事あるに以て
 測海の事をも思ひ減らばも亦ゆくゆくは減らさず
 なる大抵と云ふ
 ○ 蓋し古く古人の事として其も元録年中の事にして
 其代も亦遊ふ事といふ事あるに以て
 測海の事をも思ひ減らばも亦ゆくゆくは減らさず
 なる大抵と云ふ
 ○ 蓋し古く古人の事として其も元録年中の事にして
 其代も亦遊ふ事といふ事あるに以て
 測海の事をも思ひ減らばも亦ゆくゆくは減らさず
 なる大抵と云ふ
 ○ 蓋し古く古人の事として其も元録年中の事にして
 其代も亦遊ふ事といふ事あるに以て
 測海の事をも思ひ減らばも亦ゆくゆくは減らさず
 なる大抵と云ふ

○ 志して四書五經の源を能くしつゝ部考不分類の書も前考
しつゝやあつたやん程かゝるをのみ

○ 志子の母しつゝ人の固所得あつたやん元來諸書熟せる
より得らるゝの事そし其書に益あつて所より得らるゝ

○ 志子を教ふるに坤て志人と女を徳業法猶也し一徳を
年未申其意不詳とあるやん書にたよる志の教子を

○ 志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに
も終しと業申なるは史記書也と云ふ事と云ふはあつたやん

○ 志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに
あつたやん再案の判もあつたやん

○ 其書と志子の源の書と志子の母と志子の志と云ふは
志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに

○ 志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに
志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに

○ 志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに
志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに

○ 志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに
志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに

○ 志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに
志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに

○ 志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに
志子の志と業とふつゝもあつたやん志子の志を補ふに

採歌の帯あはれは歌工出雲の一助とす

○ 昔歌とよほしむるもの母くはに加ふてはる余歌

あつと目録より下付ある者其歌をよく志す人

よき歌の下をえん合ては下目と引合ふはし

松西路 著 久人

丁未歳 白字の



古人五言歌 春之部 目録

五言	初丁	撰	二	糸山	三	神撰	四
抄	四						
元日	四	神室	五	まじり	五	神詠	五
神うす	五	まの鳥	五	神楽	五	神一階	五
まの鳥	六	春の鳥	六	今朝の表	六	花のはら	六
江左の妻	七	梅の枝	七	川根	七	大あく	七
はるめ	七	屏風	七	難老	七	たは	八
春のつ	八	蓬菜	八	若翁	八	春の	八

利虫の毛	種ちり	棲木	けりく	新子	ひめ	ひめ	子のは	美葉	年玉
十八	十七	十六	十六	十五	十四	十三	九	十	八
木蓮	連翹	海棠	木瓜	すくね	花の葉	下菊	少和川	植物之部	紫山
十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	九		八
木蓮	連翹	海棠	木瓜	すくね	花の葉	下菊	七種		紫山
十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	九		九
木蓮	連翹	海棠	木瓜	すくね	花の葉	下菊	紫山		紫山
十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	九		九

竹葉	花	草	雀子	帰鳥	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子
十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八
雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子
十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八
雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子
十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八
雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子
十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八
雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子	雀子
十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八

鳳中	三十一	長入	三十一	修容	三十一	河之乃	三十一
安ら	三十一	焼里	三十一	雪向	三十二	残雪	三十二
春風	三十一	春風	三十二	春解	三十二	春風	三十二
春の空	三十二	春の山	三十二	春の山	三十四	春の山	三十四
春の山	三十四	春の山	三十四	春の山	三十四	春の山	三十四
海苔	三十五	海雲	三十五	雪合	三十五	草嶺	三十五
陽春	三十五	糸遊	三十五	二日炎	三十六	神牛	三十六
彼小春	三十六	御忌	三十六	涅槃	三十六	西行忌	三十七
長き日	三十七	水代	三十七	笠	三十八	鈴合	三十八
夕子	三十八	曲久	三十八	長軍	三十九	畑打	三十九
つとま	三十九	山入	三十九	初春	三十九	春編	四十
都而る五十二額							

十口人五口部 夏之部目錄

生るる口部			
あつと	三十一	東去	三十一
より	三十二	静	三十二
多勢	三十四	練	三十四
輪	三十五	羽	三十五
子子	三十六	虫	三十六
蚊	三十七	蚊	三十七
錦	三十八	蚊	三十八
あつと	三十一	老	三十一
より	三十二	羽	三十二
多勢	三十四	水	三十四
輪	三十五	三	三十五
子子	三十六	梶	三十六
蚊	三十七	蚊	三十七
錦	三十八	蚊	三十八
あつと	三十一	學	三十一
より	三十二	羽	三十二
多勢	三十四	堂	三十四
輪	三十五	堂	三十五
子子	三十六	經	三十六
蚊	三十七	觸	三十七

時儀之部

東衣	九	裕	九	喜望廉	九	葵衣	十
中衣	十	中衣	十	白中衣	十	白中衣	十
夏衣	十一	夏衣	十一	灌餅	十一	夏衣	十一
新衣	十二	新衣	十二	みし衣	十二	喜衣	十二
喜衣	十三	喜衣	十三	新	十三	新	十三
乃衣	十四	乃衣	十四	乃衣	十四	乃衣	十四
乃衣	十五	乃衣	十五	乃衣	十五	乃衣	十五
乃衣	十六	乃衣	十六	乃衣	十六	乃衣	十六
乃衣	十七	乃衣	十七	乃衣	十七	乃衣	十七
乃衣	十八	乃衣	十八	乃衣	十八	乃衣	十八
乃衣	十九	乃衣	十九	乃衣	十九	乃衣	十九

夏目一

帽子	十九	襪周令	十九	紗室	十九	雲の室	十九
夏衣	二十	夏衣	二十	土月	二十	土月	二十
夏衣	二十一	夏衣	二十一	夏衣	二十一	夏衣	二十一
夏衣	二十二	夏衣	二十二	夏衣	二十二	夏衣	二十二
夏衣	二十三	夏衣	二十三	夏衣	二十三	夏衣	二十三
夏衣	二十四	夏衣	二十四	夏衣	二十四	夏衣	二十四
夏衣	二十五	夏衣	二十五	夏衣	二十五	夏衣	二十五
夏衣	二十六	夏衣	二十六	夏衣	二十六	夏衣	二十六
夏衣	二十七	夏衣	二十七	夏衣	二十七	夏衣	二十七
夏衣	二十八	夏衣	二十八	夏衣	二十八	夏衣	二十八
夏衣	二十九	夏衣	二十九	夏衣	二十九	夏衣	二十九
夏衣	三十	夏衣	三十	夏衣	三十	夏衣	三十
夏衣	三十一	夏衣	三十一	夏衣	三十一	夏衣	三十一
夏衣	三十二	夏衣	三十二	夏衣	三十二	夏衣	三十二
夏衣	三十三	夏衣	三十三	夏衣	三十三	夏衣	三十三
夏衣	三十四	夏衣	三十四	夏衣	三十四	夏衣	三十四
夏衣	三十五	夏衣	三十五	夏衣	三十五	夏衣	三十五
夏衣	三十六	夏衣	三十六	夏衣	三十六	夏衣	三十六
夏衣	三十七	夏衣	三十七	夏衣	三十七	夏衣	三十七
夏衣	三十八	夏衣	三十八	夏衣	三十八	夏衣	三十八
夏衣	三十九	夏衣	三十九	夏衣	三十九	夏衣	三十九
夏衣	四十	夏衣	四十	夏衣	四十	夏衣	四十

糸竹の葉	廿九	ひたしこ	廿九	志西の葉	廿九	柿の葉	三十
糸竹の葉	三十	葉の葉	三十	牡丹	三十	芍薬	三十一
糸竹の葉	三十一	苔の葉	三十一	けい	三十一	薔薇	三十二
糸竹の葉	三十二	葉	三十二	茄子	三十二	あじさい	三十三
糸竹の葉	三十三	葉の葉	三十三	柑子	三十三	百合	三十三
糸竹の葉	三十四	葉の葉	三十四	アサギ	三十四	梅	三十四
糸竹の葉	三十五	葉の葉	三十五	あやめ	三十五	蓮の葉	三十五
糸竹の葉	三十六	葉の葉	三十六	草薺	三十六	蓮	三十六
糸竹の葉	三十七	葉の葉	三十七	かたむき	三十七	あじ	三十七
糸竹の葉	三十八	葉の葉	三十八				
都而る六十歌							

花

古人五言題詩の葉

春之部

南總

暹羅菴電足 授合

花咲て七日移るる禁下り船
 志はくを花のよきあはれ
 一僕とかくしありく花見は
 花の葉にまきく花見の林うな
 花のちうて浮世の風をたうらり
 花の風うまき花を吹き海の池
 何事をも花見く人の長刀
 花の葉の枝をたうらり花の中

芭蕉
 季吟
 伝徳
 室軌
 光雪
 去来
 大草

春の風は候もいづる春の風か
 羽をたそふに地をたそふにす
 春の雲もたそふに花もたそふにす
 花もたそふに葉もたそふにす
 葉もたそふに実もたそふにす
 実もたそふに種もたそふにす
 種もたそふに土もたそふにす
 土もたそふに水もたそふにす
 水もたそふに火もたそふにす
 火もたそふに風もたそふにす
 風もたそふに天もたそふにす
 天もたそふに地もたそふにす
 地もたそふに人もたそふにす
 人もたそふに物もたそふにす
 物もたそふに事もたそふにす
 事もたそふに法もたそふにす
 法もたそふに道もたそふにす
 道もたそふに徳もたそふにす
 徳もたそふに功もたそふにす
 功もたそふに名もたそふにす
 名もたそふに実もたそふにす
 実もたそふに徳もたそふにす

許六
 正秀
 豊久
 吉栄
 常存
 本蔵
 明徳
 史部
 杉屋
 松屋
 沼屋
 卯七

春の風は候もいづる春の風か
 羽をたそふに地をたそふにす
 春の雲もたそふに花もたそふにす
 花もたそふに葉もたそふにす
 葉もたそふに実もたそふにす
 実もたそふに種もたそふにす
 種もたそふに土もたそふにす
 土もたそふに水もたそふにす
 水もたそふに火もたそふにす
 火もたそふに風もたそふにす
 風もたそふに天もたそふにす
 天もたそふに地もたそふにす
 地もたそふに人もたそふにす
 人もたそふに物もたそふにす
 物もたそふに事もたそふにす
 事もたそふに法もたそふにす
 法もたそふに道もたそふにす
 道もたそふに徳もたそふにす
 徳もたそふに功もたそふにす
 功もたそふに名もたそふにす
 名もたそふに実もたそふにす
 実もたそふに徳もたそふにす

豊貴
 友五
 仙北
 氷名
 杉屋
 松屋
 北城
 尚白
 神人
 卯七

櫛

寝入るを物引きやうたのちや
醉ふりやうた下晴りやうたの山
隠家子朝たうたやうたやうた
もてあまやうたのちやうたやうた

豊多
有辞
た唯
印唯

木のちやうたけも櫛も櫛うた
唯中やうたのちやうたの山かつら
名のつらぬ所うたのちやうた櫛
美えんうた櫛あむちうた櫛
七のちやうた櫛子牛の白ひら

其角
出春
尖羊
酒堂

唯新てん中うたをむ山さくら
尺のちやうた櫛一山さくら
唯理まやうた櫛を山さくら山櫛
唯らうたさくらうた七さくら山
山さくら櫛をたうた櫛もあ
尺櫛を山さくら櫛のちやうた櫛
ちやうた櫛のちやうた櫛さくら
唯七のちやうた櫛さくら山さくら
山櫛を山さくらうた櫛もあ
唯らうた櫛のちやうた櫛さくら
山さくら櫛のちやうた櫛さくら
唯七のちやうた櫛さくら山さくら

一鉄
赤山
向車
唯山
出尺
木因
自槐
山川
積離
杉風
松記
後記

糸様

山さくらちり小川の久車
是てこそ命押りれ様
かへえ人のやうにし山さくら
りふ子ゆりふあまも山様
と氣をさるる先びとて山様
一はうとて鳥のさあす様
のもれさす様のもやとさすけ

糸生えらるるをさるるはく
るゆゆも春のさあす様
糸様すこし山風のさるるよ
若大わたり様ちるる糸はら

糸
糸
糸
糸
糸
糸

乙
乙
乙
乙
乙
乙

初様

咲きよす柳の中さるる様
尺さ所さるるさるる柳様
安小坂のさるる柳様
さるるさるるさるる柳様
さるるさるるさるる柳様
さるるさるるさるる柳様
さるるさるるさるる柳様

了也の人のさるる様
さるるさるるさるる様
さるるさるるさるる様
さるるさるるさるる様

乙
乙
乙
乙
乙
乙

乙
乙
乙
乙
乙
乙

おのれをほひまつきて様、
造りもの中に由向らぶる様
残房の事よしよ造りたる

虫籠
山川
紫雲

元日

元日子田毎の日にそ悪し
元日子炭賣十乃指黒し
元日お晴くは崖のよのか
元日お家子ゆつりのお分を
元日お神代のもも地り
元日お何子まよくむ
元日お山おを聖川の
元日も難業の後のひり

岩
其角
鬼重
吉米
守成
忠知
東山
而助

卯空

卯空おかしすと
卯空おは美山
卯空お新あ書のの道

山
友
多

ちつ日

ちつ日お大
ちつ日お
ちつ日お

任口
交考
乙由
利牛

卯新

卯新お
卯新お

桑輔
可風

卯辰

我意のねはもさそく卯辰
拙犯の意のねさうねうさう辰
芝浦や車の子卯辰のす

西野
鉢山
起波

未の鳥

布りしと為ぬらあや息の春
未の鳥のすすうさうかうさう

聖坡
言明

卯東風

初東風や四海はあきあき代
未の鳥や家外はも民のあ

宗類
多餅

卯曆

一年もあつたにきあし一卯辰
眼鏡さうねうさうさう曆

宗白
乙虫

卯愛

未の鳥や愛さうさうさう代
卯辰のあやあさあさと重結さ

書吟
令徳
安室

春立

春さうらわ齒菜にうさあ神夫のね
はさうさうやけさうさう世さう

許六
聖坡

卯辰
未の鳥

強さうらわあさうさうさう春
刀さうさうあつたさうさうの春
年勢浦やあさうさうさうの春
未の鳥さうさうさうさうの春

書
正書
亀洞
海老

美 九 けり

草も木もめでたしこしはのま
けり夕の人もめでたしこしはのま
西遊にこそめれうらたけりけり
細暗藤すこめさらけりけり

貞徳
宗因
休甫
石唯

後人を燕着ておますけりけり
めんしめ物をもとめけりけり
花のけりけりけりけりけり
むの春を遠寄公やたえけり
花のまきけりけりけりけり
投入り下もも屋ぶりけりけり

菊
嵐雪
雪舟
文傑
釣雪
柳舟

江戸
九 表

江戸の春
海直一朝日のももをけりけり

其角
作老
久野

福
九 表
中

福喜草堂にめでたしけりけり
懸のあつたのまをけりけり
めんもむもむもむもむも

其角
扇雪
危士

川
九 表

けりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけり

徳元
其角
去来

大ぬの

大福を去るのまゝの白ひの
大ぬのを去るのまゝの遊ひの
たぬのの癖の癖の癖の癖

路川
招風
尚白

はら

遠国子梅のたかかへにちひひ
たかかへたかかへたかかへたかかへ

如形
北枝

居る

居るさうして小深さむ娘の子
いとをたかかへ居る娘のまゝの

立志
奇号

難者

西ぬもたかかへたかかへたかかへ
及旅の難者まゝのたかかへたかかへ

嵐者
車庸

大著

大著の命をたかかへたかかへたかかへ
たかかへたかかへたかかへたかかへ

安藤
知七

喰つ

たかかへたかかへたかかへたかかへ
たかかへたかかへたかかへたかかへ

山崎
徳久
柳居

蓬来

蓬来の命をたかかへたかかへたかかへ
たかかへたかかへたかかへたかかへ

翁
山居
岩居
鬼費

若餅

若餅や暖る肴の中へは梅もあ
つらむらひゆき足の上をぬくりり

巴都
和久

若神

若神はちて結成し字の吉事
大津路の字のちりき何 併

宗經
孫

守玉

守玉に梅野乃小雲の露の事
守玉やよの夜から世のちりさ

言久
了明

若菜

若菜やたふまひりてぬの露
若菜やまゆりて遠入に折戸
中人もやまへちりても 什をりら

若菜
折戸
黒香

若羽子

若羽子やあこめ子受る年
わすれにやちりて夜志の味あり
若羽子に地をぬくりのゆめか

本導
利牛
葉露

水祝

水祝に梅野乃小雲の露の事
水祝に梅野乃小雲の露の事

其角
沾圃

若久

若久やあまきと来に世のちり
つらむらひゆき足の上をぬくりり
若久やよの夜から世のちりさ
若久はちて結成し字の吉事

若久
了明
宗經
孫

子の目

子の目に都く影をい友もろ
ひらく霞もよた霜のくす神子の目
筆跡を大指移るる子の目か

影
去来
筆字

か

か
引

五子目を括て移るるか
以形くすかか移るるか
君うくすかか移るるか

白尼
重校
字

七種

七種や移りては子の目
形くすかか移るるか
七くすかか移るるか
あくすかか移るるか

桐
其角
北城
枕

世

世の世にたつた世の世
世の世にたつた世の世
世の世にたつた世の世
世の世にたつた世の世
世の世にたつた世の世
世の世にたつた世の世
世の世にたつた世の世
世の世にたつた世の世
世の世にたつた世の世
世の世にたつた世の世

車
乙
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角

茶 茗

昔は弱子りふき賣りの茗那外
白濁かゝる中味りりりなるつ
茗茶つとまゝのやむさん懐
七色子つぬつとやすまるひ
りふつぬつとやむる留るを
つとと留てやむるつるひ
る茶の味やむるの茗茶かあ
るち種つぬつとやむるひ
つと種つぬつとやむるひ
茗茶つぬつとやむるひ
懐つぬつとやむるひ
茗茶つぬつとやむるひ

其角 吉来 土芳 楚有 源化 曲製 他扶 路通 於風 史邦

芥

大内の節起りくつぬつぬ
る茶の味やむるの茗茶かあ
るち種つぬつとやむるひ
つと種つぬつとやむるひ
茗茶つぬつとやむるひ
懐つぬつとやむるひ
茗茶つぬつとやむるひ

其角 惟物 翠白 文叶 祖竹 如穎 山庄 工麻

梅

梅の昔にのりや見のあはれ
山はまの山はまの山はまの山はま
那のりし支城の山はまの山はま
うめいりん一婦りのあはれ
梅の昔にのりや見のあはれ
一決けしう白梅の山はまの山はま
横の山はまの山はまの山はまの山はま
あはれを山はまの山はまの山はま
梅の昔にのりや見のあはれ
同じくして山はまの山はまの山はま
梅の昔にのりや見のあはれ
梅の昔にのりや見のあはれ
梅の昔にのりや見のあはれ

其角
去来
凡兆
尚白
梅隣
從古
猿籠
架ト
山

梅の昔にのりや見のあはれ
山はまの山はまの山はまの山はま
那のりし支城の山はまの山はま
うめいりん一婦りのあはれ
梅の昔にのりや見のあはれ
一決けしう白梅の山はまの山はま
横の山はまの山はまの山はまの山はま
あはれを山はまの山はまの山はま
梅の昔にのりや見のあはれ
同じくして山はまの山はまの山はま
梅の昔にのりや見のあはれ
梅の昔にのりや見のあはれ
梅の昔にのりや見のあはれ

丹聖
字白
一字
一盤
中由
急日
乙中
柳枝
多枝
七七
石叻

紅梅

木 の 葉

紅梅や白の葉をさる新志すい
わくたふハ眼はを御葉戸ハ
紅梅の白あめして後のたをさハ
わくたふ子まきく様さふあえうが
紅梅や葉の強うあち那木の
紅梅の葉もをあめはあこハ
あえんつハハ一葉のらんあ本めハ
葉はあのかき那うも木の葉ハ
葉を中を長あておさすれあが
葉を中を長あておさすれあが
あしあを中を長あておさすれ
あしあを中を長あておさすれ

七重平
杉風
如新
柳花
白梅
赤梅
紅梅
白梅

萩の 葉

葉

種 也

あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら

岩香
子祐
丹紫
聖坡

あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら

岩香
支考
松舟

あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら
あまのふらふらあまのふらふら

岩香
余下

五架

ちりぬく錦法おすま五架あは
そとせちてことた子登の念仙

味名
扇重

す
〜
終

山脈事は何中〜す〜
あ〜りのお〜り〜
白糸練の骨方に志花世す〜
終子の尻のなさ〜
舌えん〜りの法を世の志をさる
境よりあらはなむをさる
傾城の白雲んさるす〜
ぬをまにあら〜
披あり〜お田の舟わす〜

菊
聖名
園也
秋名
舟矣
舌莞
涼菴
之道
るゆ

終

〜人あ〜の〜
〜の早のあ〜
〜世あよ〜

園
宛
宛

〜

市名の海志屋わお〜
古橋わ横ま〜
り船わよを延〜
たわ〜
は〜

海舟
雲箱
お文
禪寺
支考

割

〜京咲〜
〜利も〜

菫雀
支考

木瓜

砂川やまにそくして木瓜のた
木瓜の果はまじく味は酸なり
乃其に志つて葉や花をのり
是の血を木瓜は別名を木瓜

猿 熊
山 梅
川 豆

薏苡

言浪は草多角のつぎの形
川波や浪をまじりて薏苡の角
又さき相若るあまうし楳木が
はたさうとて火のぬきんつぎ
比し柳をまじりてなるも
中世にちと踏をあたつて楳木
楳木木瓜の葉年々んはま

尚 尙
楳 楳
角 角
一 一
薏 薏
苡 苡

楳木

楊花

楊花乃名もあしや楊花
まじりて木瓜の楊花のめえ
口の影を猫の垢やすくま
うやの葉や花をちと踏の道
香をばや垢をばはくま

其 楊
角 花
一 一
楊 楊
花 花

桑

桑の葉をえりて桑の葉つ
山桐や地のりもろく桑の
桑の葉をえりて桑の葉つ
桑の葉をえりて桑の葉つ
桑の葉をえりて桑の葉つ
桑の葉をえりて桑の葉つ

出 山
山 桐
化 桐
化 桐
化 桐
化 桐

草

草の多に中に堪あり部一
那はあやふ心なうあつと一
草のたわ戸いんつとつと
那のたわ赫まこつと草ひ
草のたわ戸いんつとつと
草のたわ戸いんつとつと

其角
史部
嵐堂
松若
石明

種
部

種部一 遠よりいれお
当りつとつと一とあつと
種ちして決まよう部
めつとつとつと種

其角
毎石
尚公
石明

桃

桃のたわ戸いんつとつと
桃のたわ戸いんつとつと
桃のたわ戸いんつとつと
桃のたわ戸いんつとつと
桃のたわ戸いんつとつと
桃のたわ戸いんつとつと
桃のたわ戸いんつとつと
桃のたわ戸いんつとつと
桃のたわ戸いんつとつと
桃のたわ戸いんつとつと

其角
史部
嵐堂
松若
石明

海棠

海棠花を咲てあつちう一輪の
かひやうと花のさあつちのあつちの時
あつちと花をさあつちと咲ちう
かひとちうと咲ちうと子の顔の色
海棠花をかちうと咲ちうと咲ちう

重根
酒中
て中
春園
尚公

連翹

連翹花の咲ちうと咲ちう
さつちと花の咲ちうと咲ちう

湖春
相存

梨の花

梨の花の咲ちうと咲ちう
さつちと花の咲ちうと咲ちう

支考
昔伴
尚公

李

李の花の咲ちうと咲ちう
さつちと花の咲ちうと咲ちう

尚白
通雪

辛夷

辛夷の花の咲ちうと咲ちう
さつちと花の咲ちうと咲ちう

尚白
巴久
通雪

木蓮

木蓮の花の咲ちうと咲ちう
さつちと花の咲ちうと咲ちう

子那
尚白

芍薬

芍薬の花の咲ちうと咲ちう
さつちと花の咲ちうと咲ちう

仙化
昔伴
春久

苗代

苗代をえておる森のかしりう那
那りらわらぬし兵にも那く
苗代は素孝の塔のみかゝる
名はく鞠のめきりし苗代
おりしるにそめあひのすさ
苗代や仁王の御船定の
那りしるにそめあひのすさ
泥る巻やあしるあ子味つ
猿の鼻に苗代あやあ
苗代やあしるあ子味つ
那りしるにそめあひのすさ
け田志のあしるあ子味つ

支考
許六
朱迪
支考
子英
聖塔
而澤
史邦
尚印
瑞川
折若
久綾

世歌

狗吠のまきもあつては
き色しや焼野のそめあひの
早らしむいおまあひのそ
一人のまきいのおやわ
瑞きよ道わらひのまき

嵐世
史之
正典
結鏡
即解

胡荽

胡荽やあしるあ子味つ
あしるあ子味つあしるあ

史邦
岩翁

夏

夏のあしるあ子味つ
あしるあ子味つあしるあ
あしるあ子味つあしるあ
あしるあ子味つあしるあ
あしるあ子味つあしるあ

瑞川
折若
史邦
岩翁

云々

至子派系おとせしと世より燕
山の移りてくるをうすし入るか
鎌倉の街を道をもつて燕く
はるるを子もとらふ所の隙も
えまのまて流る中形こころ
ありくと培る所のはをあら
こころの葉を散るる燕の事
あめの紙帳の中やあつそめ
こころや行くまゝうまもさ
をさふをよこしてはをあら
こころのゆをいつれて中う
世の中の様候志をぬはをあら

其角
尚尔
金屋
才磨
怒誰
本守
一毫
乙中
柳若

駒

何事をも能くすはを世より燕
夕飯のりありて這入こころ
こころのおつきとあしと解く
押りらあしとあしと解く
駒の目のさやをのさ言根
あつたのさあつたひり
こころのさあつたひり
山の井の駒駒うらや解く
秋のさあつたひり
ひりやあつたひり

海老
夕飯
印
印
印
周
式
子
巴

響

ま

蛙

るの蛙 蛙あまの形もよき形も
庭かと蛙あく虫や空のり
おん力て〜無〜のり〜
草のたを〜も〜のり〜
軸〜のり〜
草のたを〜も〜のり〜
棒〜のり〜
〜のり〜
〜のり〜
〜のり〜

其角
大44
本南
北境
乙所
言文
柳所
麻文
多録
石所

七七

田

螺

蛙

蛙の形もよき形も
庭かと蛙あく虫や空のり
おん力て〜無〜のり〜
草のたを〜も〜のり〜
軸〜のり〜
草のたを〜も〜のり〜
棒〜のり〜
〜のり〜
〜のり〜
〜のり〜

猿
四
十文
吉
朱
堂
志
尚
江
石

若 能

能の子の如くすまはし一清の如く
一の如くすまはしにちほく小能外
清き命しちあむかあむか
清き命しちあむかあむか

玉子
圓え
若者
潤子

うねお

うねおの如く影をさあさうく
似代士のうねおさうさう清く

若者
前口

若 刺

若乃日の如く存して蘇の如く
如く若く一和や摩那の若の如く
安んじく一和の如く若く一和
うねおをすすすもんあふ蘇外

若者
尺鏡
玉子
若者

住保能

住保能の如くいの如くうさう
はあひあやあやあううを住保能

若者
字

ちり

十五の如く晴ぬの古く
正の如く之れも昔さう春の如く
正の如く之れも昔さう春の如く

若者
傘下
與之
若者

まら 死

まらとちあふ柳と梅の如く
つたの如くすまはしにちほく
つたの如くすまはしにちほく
つたの如くすまはしにちほく

若者
交者
山嵐
秋
尚白

弥生

神風の浦生をぬりし川の舟
此かくし知のたはむ海すか
花も塚に草のたはむ花よむか

嵐重
山川
石川

た
義
虫

日のたやもあしきとあそびた義虫
比きても中太極をくらえり
た義虫や河の中へ渡りしおれ

李以
尚尔
素勇

細

3 |

細川やあつまら子一仁王
去るあわねをあそび細い
細いよやたの利しち男

嵐流
而得
宇存

中
義

春あられやあそびた義虫
せしつとと此のたはむか
中義つととあそびた義虫
去るあわねをあそび細い
先唯てあそびた義虫
実よりたはむ中義虫
外人のあそびた義虫
去るあわねをあそびた義虫
あそびた義虫のたはむか
あそびた義虫のたはむか
あそびた義虫のたはむか
あそびた義虫のたはむか
あそびた義虫のたはむか
あそびた義虫のたはむか
あそびた義虫のたはむか

義
杉風
言々
見費
弄号
石口
冬文
法遠
波若
柳若
冬敏
石川

功
存記

猫の意や心討置入地なる自
然多し其味おぬとぬれん種く
抄ありとるはの運法よぬ出い
るまの意よぬ種まよ種く
味ゆき意の考くゆりわ地ぬぬ
淀子の地ゆりぬりぬらぬぬ
夕風子何ゆぬありおぬぬ
三のぬ子ゆりぬる種地ぬぬ
大御の脚るぬぬ種く種く
梅う香の志くぬぬ種く種く
ぬりぬぬにぬぬ種く種く
地ぬらぬぬぬぬの古種玉

海
志来
其角
赤川
末部
古根
地境
前川
冬種
柳古
深魚
而印

鳳中
入善

木乃種ありぬぬ一のぬぬ中
中中中一のぬぬ種く種く
切ぬ中のぬぬ種く種く
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
風中志川古種く種く種く

山雪
屋雪
此類
赤魚
白魚
冬種

善入の温鈍くぬぬぬぬぬ
やぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
善入のぬぬぬぬぬぬぬ
やぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

支考
其角
蓮之
柳古
冬種
古魚

除

雪の行はかきくは除雪か
神の心ゆくも一友に成る
はたきくはの雪もあつた

支考
改直
乙生

雪

雪の中をゆくゆくは雪
雪の中をゆくゆくは雪

支考
改直

暖

あまのうらみあまのほ
暖かきうらみあまのほ

支考
改直

焼

そのけり焼くは焼くは
そのけり焼くは焼くは

支考
改直

雪

雪のうらみあまのほ
雪のうらみあまのほ

乙考
其角
十竹
雪の
候

残

残のうらみあまのほ
残のうらみあまのほ

乙考
其角
十竹
雪の
候

東風

東風のうらみあまのほ
東風のうらみあまのほ

乙考
其角
十竹
雪の
候

春 陽 解 雪

春の風や春の雪のやうにゆくもなほ
美のよきおぼるもなほ一春の風
旅子の旅子春の風ゆきく影の
春の風や春の雪のやうにゆくも
おのしづみ又あははるるも
春の風や春の雪のやうにゆくも
春の風や春の雪のやうにゆくも
春の風や春の雪のやうにゆくも
春の風や春の雪のやうにゆくも

春の風
美のよき
旅子の旅子
春の風
おのしづみ
春の風
春の風
春の風
春の風

春 日

春の風や春の雪のやうにゆくも
美のよきおぼるもなほ一春の風
旅子の旅子春の風ゆきく影の
春の風や春の雪のやうにゆくも
おのしづみ又あははるるも
春の風や春の雪のやうにゆくも
春の風や春の雪のやうにゆくも
春の風や春の雪のやうにゆくも
春の風や春の雪のやうにゆくも

春の風
美のよき
旅子の旅子
春の風
おのしづみ
春の風
春の風
春の風
春の風

春の雪

春の雪

是れは春の雪に似たりは春の雪を
春の雪をふりかきしる人由は言ひし
ありやをやくはくしり春の雪
余りもふりかきしる人由は言ひし
ありやをやくはくしり春の雪
春の雪をふりかきしる人由は言ひし

春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし

支秀
一英
巴新
子達
石川

石川
尚尔
貝風
石川

春の雪

春の雪

春の雪

春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし

春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし
春の雪のふりかきしる人由は言ひし

石川
尚尔
貝風
石川

石川
尚尔
貝風
石川

春
り
り

春の聲や木屑を散らしの姿を
詠めばあまの春の聲をよめる
春の聲や木屑を散らしの姿を
詠めばあまの春の聲をよめる
如くはあまの春の聲をよめる

法純
許六
兼山
一存
宗

春
の
え

春のあまの春のえ
うらやまの春のえ

鬼
あま

水
の
う
ら

水の流れやあまの春のえ
水の流れやあまの春のえ
水の流れやあまの春のえ

虫
里
知

海
の
え

海のえやあまの春のえ
海のえやあまの春のえ

其
角

海
の
え

海のえやあまの春のえ
海のえやあまの春のえ

草
凸

空
の
え

空のえやあまの春のえ
空のえやあまの春のえ

翠
白
之
吹
琴
丸

山
の
え

山のえやあまの春のえ
山のえやあまの春のえ

山
理
梅

陽 中 糸 遊

この糸は子の子糸を子とて糸をい
陽を中とて糸をいぬとて糸の糸
かたはら糸をあらうとて糸の糸
陽を中とて糸をいぬとて糸の糸
この糸は子の子糸を子とて糸をい
陽を中とて糸をいぬとて糸の糸
かたはら糸をあらうとて糸の糸
陽を中とて糸をいぬとて糸の糸

許六
土著
新字
傘下
即歳
茂字
乙卯
立志
糸線
水月
尚尔

二日 糸 子 神 考

糸の糸は子の子糸を子とて糸をい
陽を中とて糸をいぬとて糸の糸
かたはら糸をあらうとて糸の糸
陽を中とて糸をいぬとて糸の糸
この糸は子の子糸を子とて糸をい
陽を中とて糸をいぬとて糸の糸
かたはら糸をあらうとて糸の糸
陽を中とて糸をいぬとて糸の糸

糸士
糸目
柳若
糸線
糸目
糸目
糸目
糸目
糸目
糸目

御忌

御忌の日に腰のくちう物事し
とくたぬ御忌のまじり忌の持
つたまじり持たしつた御忌の御

丁而得
太吉書
泰徳

理

樂

理樂令中樂子令きり理樂のま
熟を吹らふし御忌人 像
ゆふまじりあつた御忌人 像
御忌人像とあつた御忌人 像
木御忌人御忌人より御忌人
御忌人御忌人御忌人御忌人
御忌人の御忌人御忌人御忌人
御忌人の御忌人御忌人御忌人
御忌人の御忌人御忌人御忌人

御忌
御忌
御忌
御忌
御忌
御忌
御忌
御忌

御忌

御忌

御忌

御忌の日に腰のくちう物事し
とくたぬ御忌のまじり忌の持
つたまじり持たしつた御忌の御

丁而得
太吉書
泰徳

御忌の日に腰のくちう物事し
とくたぬ御忌のまじり忌の持
つたまじり持たしつた御忌の御
御忌の日に腰のくちう物事し
とくたぬ御忌のまじり忌の持
つたまじり持たしつた御忌の御

御忌
御忌
御忌
御忌
御忌
御忌
御忌
御忌

水代

出代や地はぬさるる物と
疎コ層やあらる次のまの林
出らるや撫子集れり草の尖
出代やあまのさすき奉加
出かしの猫さすき列の
出代は幸子さすきお
出らるやさるるの面も
出らるや縁体さすき
出らるの運や物瓶の
出代は通る名つさすき
出らるやさるるさすき表の

山を
少那
龜翁
伴六
本用
浮風
了む
乙許六
志翁
了り

三十七

能

能合

かひのまの神さるる
不ぬの能のつらさ
格さるるにさるる去の能
さるるに棟つさるる能
能松やむらさるる能
能ひぬや竹の園せの人の
能もさるる賞もさるる
能れを案さるる能
能もさるるにさるる能
能人の中さるる能
能のれぬさるる能

其角
嵐を
去来
尚分
興と
そ縁
た明
る竹
そ角
奉白
尚分
嵐流

乾 収

曲 入

古柳の泥子志堂はくは溝
知る所の泥子志堂はくは溝
浦風を様子流してはくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝

曲入の志堂はくは溝
川下に志堂はくは溝
曲入の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝

志堂
志堂
志堂
志堂
志堂
志堂
志堂

志堂
志堂
志堂
志堂
志堂
志堂
志堂

曲 入

曲 入

曲 入

古柳の泥子志堂はくは溝
知る所の泥子志堂はくは溝
浦風を様子流してはくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝

古柳の泥子志堂はくは溝
知る所の泥子志堂はくは溝
浦風を様子流してはくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝
志堂はくは溝の志堂はくは溝

志堂
志堂
志堂
志堂
志堂
志堂
志堂

志堂
志堂
志堂
志堂
志堂
志堂
志堂

春入

春入もさるる春の縁路の
みまへも春の志あつてさるる春の
春入の襟貝のしらぬはるる春

富岡
土井
昌隆

は け

けまはるる春の人の心
けのまはるる春の人の心
けのまはるる春の人の心
けのまはるる春の人の心
けのまはるる春の人の心
けのまはるる春の人の心
けのまはるる春の人の心
けのまはるる春の人の心

山川
湖春
梅
杉
松
梅
梅

春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心

鬼
之
道
石

春の心

春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心

山
巴
山

時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物

吾仲
孫末
字名
山名
山名
山名
山名
山名

時

古人ある時世のとき

多之部

南越 曠地 龜足 校合

時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物
時々の山と表も先とて中身はたの物

芭蕉扇
其
嵐雪
玄米
文章

昔の種子形もあまのついで
ついでにゆく官年もこの部
おのれの安んずる地を知らず
志は遠くをゆく事なれども
ほろろと行く身を知らず
地をゆく地のまにゆく
了歌を重くし
蜀魏形し和木の角持
たれど心もあはれ
時をゆく身を知らず
杜鰲の毛もあはれ
あはれをゆく身を知らず

守安
一
家園
智良
尚尔
重初
雲川
史部
北
治化
野
野

あまのついでにゆく
雲の片のまにゆく
時をゆく身を知らず
たれど心もあはれ
杜鰲の毛もあはれ
あはれをゆく身を知らず
了歌を重くし
蜀魏形し和木の角持
たれど心もあはれ
時をゆく身を知らず
杜鰲の毛もあはれ
あはれをゆく身を知らず

乙中
知
利牛
支考
杉凡
乙中
木因
風

及こころ雲の心なわたり
あやしく雲の心なわたり
あやしく雲の心なわたり
あやしく雲の心なわたり
あやしく雲の心なわたり
あやしく雲の心なわたり
あやしく雲の心なわたり
あやしく雲の心なわたり
あやしく雲の心なわたり
あやしく雲の心なわたり

山嵐
石明
己終
七之
名終
柳花
杜英
終意
山嵐

東古

うたを聴く時
うたを聴く時
うたを聴く時
うたを聴く時
うたを聴く時
うたを聴く時
うたを聴く時
うたを聴く時
うたを聴く時
うたを聴く時

山嵐
石明
己終
七之
名終
柳花
杜英
終意
山嵐

老

老を嘆く
老を嘆く
老を嘆く
老を嘆く
老を嘆く
老を嘆く
老を嘆く
老を嘆く
老を嘆く
老を嘆く

山嵐
石明
己終
七之
名終
柳花
杜英
終意
山嵐

きりぎりす

きりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす

きりぎりす
おきり

きりぎりす

物のももはかりおそくはるまじき
きりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす

きりぎりす
おきり

きりぎりす

川原やねを斬つてささげ
このきりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす

きりぎりす
おきり

きりぎりす

夕暮さやねを斬つてささげ
このきりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす

きりぎりす
おきり

物

物のももはかりおそくはるまじき
きりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす
きりぎりすのこゝろにきりぎりす

きりぎりす
おきり
おきり
おきり
おきり
おきり
おきり
おきり
おきり
おきり

編 媛 羽 媛

形かゝるて又なまあうはきか
押さへしあまを流さかたか
常ちや五分のほよまふの思

編媛子ありのもくドー 健貴
かかろくう形くもあま捨 のこ
このあまや袖空の香惜まにけあう
押媛の舞たちあまか形あ
このあまや室まに生けや羽の色
あうそけい中もくくま羽媛
あうあつた筆まをのて作えあひ
形正てたちえくわあまあひ

重ハ
多岐
五所

少媛
柳若
る所
る媛
高屋
る所
作媛

了 子 子 子 子 子

了 了 了 了 了 了
生あまのあまくあまん 土路

遠あまよりむむ下のあまのあ
あまのあまよりあまのあま
あまのあまよりあまのあま

あまのあまよりあまのあま
あまのあまよりあまのあま

あまのあまよりあまのあま
あまのあまよりあまのあま

其角
智所

了
曲媛
芦本

了
作媛
あま

其角
老度
る所

蚊 牛 蛇

一の種多様を言ふは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは

工舞 蓬之 而里 来山 蓬之 名蚊 凉者 冰花 枕障 秀川 ぶ卯

蟬

蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは

其角 北枝 秀川 智牙 其角 嵐林 書不 杜因 名蚊

給

懐かしき御田舎の事も給うる
ていへば一志はたしあつた
心はなほ給うるやあま
給ふの事おひきき給うる
少くもなほおまをた風給うる
我給うる事おまをた風給うる
まをた風給うる事おまをた風給うる

本因
源也
其角
吾仲
乙生
多破
乙明

書
葉

あはれつたれをあまをた風給うる
心はなほ給うるやあま
まをた風給うる事おまをた風給うる
まをた風給うる事おまをた風給うる
まをた風給うる事おまをた風給うる

嵐生
おま
乙生
多破
乙明

葉

夫れやまをた風給うる
まをた風給うる事おまをた風給うる
まをた風給うる事おまをた風給うる

乙明

葉の事おまをた風給うる
まをた風給うる事おまをた風給うる

乙明

中
全

まをた風給うる事おまをた風給うる
まをた風給うる事おまをた風給うる
まをた風給うる事おまをた風給うる
まをた風給うる事おまをた風給うる
まをた風給うる事おまをた風給うる

其角
乙生
多破
乙明
乙明

中

終極の香と香に寄はれぬ
み川しと四日の中
人たれぬ
志と書の中
茶を込のとも

香經
竹千
湯角
堀あ
香香

翠
の

月多か
形えんはく

香
運香

久
つ
文

六のや
あせも
水母も

香
久兆

夏
文

久世つ
こねつ

香
香香

花つ
とるの痛

山
山川

夏
文

傾城の
けあつ

香
香香

灌
佛

灌佛
以の
灌佛

香
香香

美 夢

以後の朝のやうにわづらひ
君の仲や思ふに中なる夢
を伐かこをたはむは法を
亡き持たぬとては船中

乙申
冬
七
丙

新 葉

去ぬる花のつぼもあまの白
雲中も物も色も清くの新葉
さうさうのやうな花を
花の手のあまにあらを
旅人の子をうけたり

翁
支考
華白
乙申

風 娘

其のそとにけりしもの
風娘のそとにけりしもの

忠
乙申

娘 夜

去ぬる花のつぼもあまの白
雲中も物も色も清くの新葉
さうさうのやうな花を
花の手のあまにあらを
旅人の子をうけたり

翁
支考
華白
乙申

懈

職

物を先て懈の白ひや二二の
ひ先を先て入る懈のうら
もやうの物も却目のかまを
はやくと散まらぬ一掃かや
物もあて懈切らるるあひ

相見や先をくお母の職うね
不物らるるまをあらあつ職ひ
よせこのおまのあやわ職のあ
職らんや先をくあな通うて
のあつ不物らるる職もまを

浪化
大業
智母
其由
言え

交考
探志
嵐休
産え
柳若

糎

高
薄
湯

糎結ふれよにたをく糎糎後
よもあくいと糎糎糎糎糎
好むのすゆわく糎糎糎糎
わす無の糎糎糎糎糎糎糎
糎糎糎糎糎糎糎糎糎糎糎
糎糎糎糎糎糎糎糎糎糎糎
糎糎糎糎糎糎糎糎糎糎糎
糎糎糎糎糎糎糎糎糎糎糎

糎糎を先て糎糎糎糎糎糎
糎糎糎糎糎糎糎糎糎糎糎

糎
嵐空
古班
糎糎
糎糎
糎糎
糎糎
糎糎

其角
言え

地

抑りの人子安んずる地の産物
夫より人の産物より地物
一物もいつての産物より
生るる産物より地物

嵐香
吉夫
江山
松色

競

本乃競子扇子かた子わつし
競つる競見え志る習者那らり
冬の色やうのくく子又定れ
又ささちの産物や侍る競る

半砂
定亮
沙名
孤屋

什碎

降つたとも什揃るる産物
什揃るる産物の産物かた

舟
舟
舟

お

あつたおつた産物かた
おつたおつた産物かた
おつたおつた産物かた
おつたおつた産物かた
おつたおつた産物かた
おつたおつた産物かた
おつたおつた産物かた
おつたおつた産物かた
おつたおつた産物かた
おつたおつた産物かた

舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟

あやう白わ物よきまのあやうも
あやうを徳意にこそ早もる
あやうを早もるあやう

柳花
早紋
る卯

入

梅の白あやうはゆきを焼く
あやうはあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも

不
不
不
不
不

虎

さびしきわ虎の洞のあやう
あやうはあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも

其
其
其
其
其

あ

あやうはあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも

山
山
山
山
山

あ

あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも

車
車
車
車
車

あ

あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも
あやうのあやうもあやうも

我
我
我
我
我

夏

順れの持えりりり夏歌り
秋の風も人をも葉の形つかり
情もさうさうの心も夏歌り
松の木の影もさうさう夏歌り

主歌
夏
一矢
ト枝

山

嘯の音もさうさう山歌り
雲の影もさうさう山歌り
鳥の音もさうさう山歌り
あつ山もさうさう山歌り

山歌
怨風
曲多
曲多

火事

火事の音もさうさう火事歌り
柱の音もさうさう火事歌り
火の音もさうさう火事歌り
あつ火事歌り

火事
海洞
山歌
山歌

田

田の音もさうさう田歌り
水の音もさうさう田歌り
風の音もさうさう田歌り
あつ田歌り

田歌
柳傳

田

田の音もさうさう田歌り
水の音もさうさう田歌り
風の音もさうさう田歌り
あつ田歌り
田の音もさうさう田歌り
水の音もさうさう田歌り
風の音もさうさう田歌り
あつ田歌り

田歌
柳傳
田歌
田歌
田歌
田歌
田歌
田歌

早

早の早は結んて細くむのほも
早の早は子のかくくはくはく
早の早はあははははははは

早
早
早
早
早
早
早
早
早
早

早苗

早苗の早は結んて細くむのほも
早苗の早は子のかくくはくはく
早苗の早はあははははははは

早苗
早苗
早苗
早苗
早苗
早苗
早苗
早苗
早苗
早苗

青田

青田の青は結んて細くむのほも
青田の青は子のかくくはくはく
青田の青はあははははははは

青田
青田
青田
青田
青田
青田
青田
青田
青田
青田

取茶

取茶の取は結んて細くむのほも
取茶の取は子のかくくはくはく
取茶の取はあははははははは

取茶
取茶
取茶
取茶
取茶
取茶
取茶
取茶
取茶
取茶

扇

尚公の紋人竹は扇子之形
わうきたニたき一は地をまじ
世方あてをひらいてえ方扇の
扇多せん画のおま方をかきし
押の形も扇の形し扇より形
祖國通し扇をたはたのあまきか

尚公
國氏
特隆
丹聖
良品
源氏

扇

ひらくた難ふとのまは扇の事
急あふはたきひもあし扇もたも
ひらくたあふひてあすや扇も
扇多せん画のおま方をかきし
押の形も扇の形し扇より形
祖國通し扇をたはたのあまきか

許六
三光
寸長
松風
支練

子

ひやう扇や秋の半のたきは
たき扇や秋の半のたきは
たき扇や秋の半のたきは

扇向
車庸
一子

子

うらひらの形はたき扇も
たき扇や秋の半のたきは

支考
杜若

子

子

許六の形はたき扇も
たき扇や秋の半のたきは
たき扇や秋の半のたきは

其角
法純
雲石
派定

収室

老の遠のりおもやうし水収候
ふゆの室柱えとらり水室を
収室ちかとの室つらとて

古室
言々
文素

雲
ち
平

雲解らにち霧ちくく雲の平
和人のたさうに雲わりのみお願
鞠ちとらあれちありりて雲の平
ほくちとあ湯殿のとや雲のち
えくちとし和えうとて雲の平

北後
中
湯毒
そ
る

和気

るをのうまあひから信者か
るあひのあまきあひりりての平

夫
和
之

宿

いやくしと宿をぬちてとる
宿のすよちとあ味とちと宿の
宿より宿宿ちかちしと宿の

宿
白
将
時

抄

抄あつら抄抄の入りりち
宿も人をもとひち抄抄抄

抄
抄
抄

中

一と一と死に中抄抄抄
程と有とさしとあむと抄抄
中抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄
中抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄
中抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄

許
去
ト
柳
る

源

源一しや極くうまをぬきり体
又すくなくとも男に生れりう
きくまや又もあけりうりや
かた後子人すのぬりやのきり
人穀のちりりり源一の中
源一しや風まの船の航り
源一けり中源一きり源一
すくしや中源一もきり源一
きり源一のきり源一あきり源一
すくしや中源一きり源一
すくしや中源一きり源一

其年
去来
源一
源一
源一
源一
源一
源一
源一

源一しや中源一きり源一
源一しや中源一きり源一
源一しや中源一きり源一
源一しや中源一きり源一
源一しや中源一きり源一
源一しや中源一きり源一
源一しや中源一きり源一
源一しや中源一きり源一
源一しや中源一きり源一
源一しや中源一きり源一

千那
本等
源一
源一
源一
源一
源一
源一
源一

風

まゆあましく世まき道まきや為旅
まゆあましく世まき道まきや為旅
まゆあましく世まき道まきや為旅
まゆあましく世まき道まきや為旅
まゆあましく世まき道まきや為旅

柳若
冬竹
古竹
改竹
几杖

打

久しとくや隙もけきもぬきとく
打えや隙のあまきとく竹の隈
久しとくや隙もけきもぬきとく
打えや隙のあまきとく竹の隈

其角
巴風
徹土

太

清徳のみみ流ちやてくち
竹のうらみ本のもま心
松のまきまきすまきまきまき

其角
秋の場

菜瓜

まゆあましく世まき道まきや為旅
まゆあましく世まき道まきや為旅
まゆあましく世まき道まきや為旅
まゆあましく世まき道まきや為旅
まゆあましく世まき道まきや為旅

其角
古竹
其角

神鈴

神鈴のあまきとく竹の隈
神鈴のあまきとく竹の隈
神鈴のあまきとく竹の隈
神鈴のあまきとく竹の隈
神鈴のあまきとく竹の隈

其角
降五

夏

昔中よりして夏を待たぬやうに地のはい
夏は情の中を羅漢の河を五月
とる身をも死びのふのひのこ

去の夏
岩白
如雲

川

川物や夢の如く
かぎりや途なきとて響ひと

舟巻
赤丸

秋

秋ちりきふのうらやま
蝶去りき若きとて結の後

舟
其考

夏
の
面

生いぢりたる顔も
面あつておむ伝あり
夏の面

岩岸
印所

秋

あめりやあうそ
秋も羅もはつと
川風も存
河のあつて
法をたぬ

其考
其考
其考
其考
其考

秋
の
花

秋の花の
秋の花の
秋の花の
秋の花の
秋の花の

其考
其考
其考
其考
其考

志

志の字や志をくくもの海川の志
年の古くして志はくく
くやくく英揚ふくくはく
松栂志りくくの中をくく
言新志すくく、蒼の志り

大志
志者
漢史
運志
如物

来 復 半

臨の田を志のくく復志を
形くく志くく志くく特の志
山休やくくくくくくく
捨やくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

思つ
安投
臨可
言指
白物

中

下くく地をくくくの輝の志
月の月のくくく山志くく
志くくくく山輝志の志
下くくくくくくくくく

窟志
白物
柳子
倫如

荒

志の志の中をくくく志あり
志くく志くく志くく志
白毫志くくくく志くく
志くく志くく志くく志
志くく志の志くく志くく

志者
窟志
柳子
字石
志物

地

地志の志
志の志の中をくく志あり
志くく志くく志くく志
志くく志くく志くく志
志くく志の志くく志くく

志者
窟志
柳子
字石
志物

サカ

夜もすかし花の香を管しるる
何れの花の香を管しるる

管地
曲景

サカ子

嬉しはる鬼やんやん子
花の香にのまるとさか子の花
かぬるまうたさか子の花

管地
管地
管地

安

さか子の花を管しるる
秋さか子の花を管しるる

管地
管地

安の
子

月持を管しるる
さか子の花を管しるる

管地
管地

安
子

さか子の花を管しるる
さか子の花を管しるる

管地
管地

安
子

さか子の花を管しるる
さか子の花を管しるる

管地
管地

安
子

さか子の花を管しるる
さか子の花を管しるる

管地
管地

櫛

木の香

昔もこの木は庭の木の香
櫛の香もさきへは櫛の香
さきへは櫛の香もさきへは櫛の香
櫛の香もさきへは櫛の香

昔もこの木は庭の木の香
櫛の香もさきへは櫛の香
さきへは櫛の香もさきへは櫛の香
櫛の香もさきへは櫛の香

杉風
水ね
志矢
子淵
春相
洞和
思只
皆存
徳之
柳之
志

解 櫛 草

昔もこの木は庭の木の香
櫛の香もさきへは櫛の香
さきへは櫛の香もさきへは櫛の香
櫛の香もさきへは櫛の香

梅香
斗山
新号
24
破刀
木下
柳之

顔 夕

夕顔や破くはあすやあとの元
 中あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元

一
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕

紫 夕

夕紫やあすやあとの元
 中あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元
 夕あはつこの都あすやあとの元

夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕

あや かん 原のつ

原のつをわきまへしとする事約の系
つらうらうら深の音を歌く流し
原のつをわきまへしとする事約の系
つらうらうら深の音を歌く流し
原のつをわきまへしとする事約の系
つらうらうら深の音を歌く流し

其角 結衣 横皮 妙我 為弓 乙中 乙中 乙中 乙中 乙中

サ 河 葦 葉

うねりやわを舞をあつちのやなふ安
サ降の降のちううの おさくても
うねりやわを舞をあつちのやなふ安
サ降の降のちううの おさくても
うねりやわを舞をあつちのやなふ安
サ降の降のちううの おさくても

乙中 素園 千代 乙中 乙中 乙中 乙中 乙中

石版子 燈 痛 入 中 漸 の 結
 喜 の 粉 や ち を て 結 ち 大 憂 心
 松 の 葉 の ち ち て 地 ま ち ち つ ち ち
 生 六 蘇 前 や 子 を ち ち 序 の 往 ち ち ち
 序 の ち ち 序 序 序 序 序 序 序 序
 面 の 機 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 夕 中 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

其 道 之 通 以 律 序 扶 起 波 去 路 琳 瑯

